

第十一回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

佐々木 毅 著『プラトンの呪縛—二十世紀の哲学と政治—』

(1998年1月10日 講談社 刊)

佐々木 毅 ささき たけし 昭和17年(1942)生まれ。秋田県出身。専攻は政治学・政治学史。東京大学法学部卒業。西ドイツ(当時)およびアメリカに留学。法学博士。東京大学法学部教授、法学部長・東京大学大学院法学政治学研究科長(受賞時)。東京大学総長を経て、現在は学習院大学法学部教授。著作は、『いま政治に何が可能か』(昭和63年度吉野作造賞)、『政治に何かできるか』(平成4年度東畑記念賞)、『マキアヴェッリ』、『プラトンと政治』、『アメリカの保守とリベラル』、『現代アメリカの自画像』他多数ある。

受賞のことば

身に余る賞を賜り、大変に嬉しく存じております。この間、二十世紀政治思想をいろいろな角度から分析して参りましたが、この著作はプラトン受容を手がかりに思想の水脈を幅広く手繰ってみたものです。その結果、当初、想像していた以上にその水脈が見つかったというのが、目下のところの自己総括であります。この問題については、本書と同じ副題を持つカール・ポパーの有名な作品がございますが、それを横目で見ながら、彼の議論も入れ込む形で全体を組み立てるよう試みました。本書のかなりの部分は和辻先生がお仕事された時代と重なっており、問題そのものにも共通面があると思われまふ。本書の執筆に際しても、当時の日本のことが常に頭をよぎっておりました。この賞を励みに今後も研究に努めたいと存じておりますが、時間が許すならば、日本の思想も視野に入れた二十世紀政治思想史を書いてみたいと考えております。

《選考委員評》

哲学と政治の本質に迫る好著

湯浅 泰雄

昔、学生のころプラトンをよんで不思議に思ったことがある。婦人子供の国家管理とか哲学者が王にならねばダメだといった議論には首をひねった。しかもプラトンは、老年まで哲人王の夢を実現しようとしてシシリーまで出かけている。この執念は一体どこから来たのだろうか。それはどうも、師ソクラテスを死に追いやったアテネの「民主政治」に対するプラトンの深い疑問と怒りではなかったか、と思われる。

佐々木毅氏は、既に『プラトンと政治』と題する大著を公刊されているが、今回の受賞作はこの前著をふまえながら、政治と哲学のからみ合いを、現代史に焦点をあてて描き出したものである。たとえば、ナチズムにコミットした知識人たちがプラトン哲学をどのように利用したか、これに対してポパーやハナ・アレントといった学者たちがプラトンの政治論についてどう考えたのか。あるいは、ギリシア哲学の専門家がこういう思想状況の中でどのような態度をとっていたのか。そういう現代思想史の一面を明快に描き出した好著である。考えてみれば、現代の民主主義もロックやルソーの哲学思想が政治を支配した結果、生れてきたものなのである。近代史の始まりとなった民主主義というものの本質について、今日あらためて考える上でも興味を覚えさせる。

本書は学術書であるばかりでなく、哲学をよく知らない一般の読者にもわかるように、平易で明快に書かれている。著者のなみなみならぬ手腕に敬服するが、ぜひ一般の読者の方も手にとってごらんになるようにおすすめしたい。

坂部 恵

「思想であれ何であれ、『安全』志向、『消費』志向が優先する時代が長く続いた日本で、本書がどう受けとめられるかは、興味のあるところである。思想が『安全』志向、『消費』

志向だけでは処理できない何物かを含んでいることを理解していただければ、本書の目的はかなりの程度達成されたといつてよい。」

著者は、本書の「あとがき」でこのようにいわれる。

「思想が『安全』志向、『消費』志向だけでは処理できない何物かを含んでいること」を今世紀現代世界のさまざまな動向のなかで、とりわけ今日の日本にあって、理解することがどれほど困難なことであるか。本書を多少とも注意深く読んで下されば、多くのかたが（おそらくは苦渋の嘆息をともなって）納得されることだろう。

「二十世紀の哲学と政治」と本書の副題にあり、「政治と哲学」とはいわれていない。ここには、つまるところ、「哲学」のない「政治」には何かいちばん大切な芯になるものが欠けているという、著者の思いが込められているにちがいない。

「プラトンの名前を濫用した巨大なおぞましい政治的実験の廃墟」と、著者が今世紀の政治の風景の一面を形容されるように、プラトンの哲学は、ナチスをはじめとする全体主義風潮の強力な味方としてしばしば引かれ、大規模に動員された。反面、部族的心性の残滓である「プラトンの呪縛」からの解放を説く声も、とりわけ英語圏に盛んであった。

こうした対立の構図におさまり切らぬ、レオ・シュトラウスの一種根底的な近代批判をこめた「古典的政治哲学」をはじめとするその周辺の動向への著者の的確な評価は、今日、まさに微温的なもたれ合い型の社会的同調主義の呪縛から逃れるために、貴重な一石としてひろく読まれてほしい。

濱井 修

西洋哲学史の常識では、プラトンはそのイデア論によって理想主義思想の源流に位置づけられる。しかし古代ギリシアでは、哲学は学問一般を意味し、国家のあるべき姿を論じる政治の学でもあった。哲人王の思想を説いたプラトンも、ポリスの現実に強い関心を抱き続けた。

本書は、二〇世紀前半の「文明」の解体期に生きた思想家にとって、自らのアイデンティティの根源であるプラトンは、秩序への強い願望を抱く峻厳なリアリストであったこと、その政治論はそのまま解釈者の立場を補強するものとなるか、あるいは逆に民主主義に敵対するものとして弾劾されるか、いずれにせよ同時代の政治思潮に色濃く影を落してきたこと、こうした事態をさまざまな論者の言説に触れながら、雄渾な筆致でドラマチックに描き出している。

著者によれば、プラトンはヒトラーの登場したドイツにおいて、自由と民主主義を批判する「全体主義の擁護者」として姿を現したが（序章）、その思想的背景は、プラトンを「社会貴族主義者」あるいは「精神の国の王」と見立てた十九世紀以来のロマン主義・反合理主義の潮流に求められる（第一部）。一方、こうしたプラトン像は、英米の自由主義者からは「反近代的反動思想家」、「閉じた社会のイデオログ」として厳しい非難の矢面に立たされた（第二部）。しかし著者は、二〇世紀前半の「政治化」されたプラトン論が、世紀後半にはあらためて哲学的に問い直されたことに注目する（第三部）。プラトンは理性的社会秩序を提唱した哲学者として、民主制の脆弱性を指摘した「善意の批判者」の相貌を現す。「平等な承認」を自明視する多元主義の「解体と漂流」の時代に、「何のためか」を執拗に問う「警告者」プラトンは、今もなお我々を捕えて離さない、と著者は言う。

本書は、今世紀西欧のプラトン論を周到にフォローして構成した現代政治思想史とも言うべきもので、我が国の政治思想史学の泰斗にして初めて著し得た労作である。現代における政治と哲学の交錯を考える者にとって必読の作品と言えよう。